



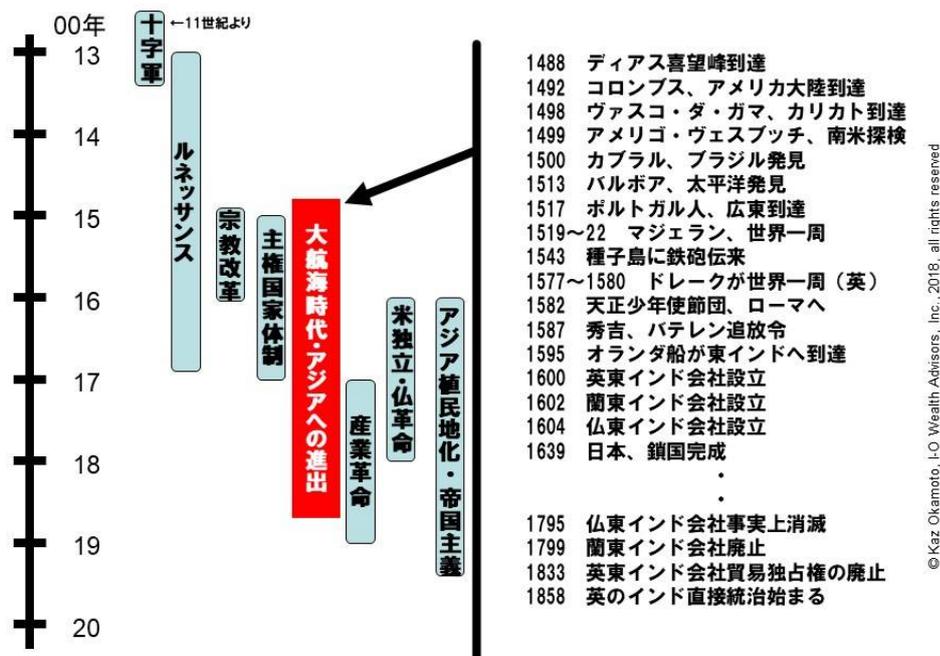
I-OWA マンスリー・セミナー講演より 東インド会社に学ぶ株式会社の原点

講演： 岡本 和久
レポーター： 赤堀 薫里

そもその始まりは 1600 年ぐらい。東インド会社によってアジアとヨーロッパがつながっていきました。インド洋、東インドの地域は貿易が非常に盛んになり、これをもたらしたのが東インド会社です。

様々な商品が行き来しました。南北のアメリカの銀が中国やインドに行き、東アジアの香辛料が中国、西アジアヨーロッパへ行き、アフリカの奴隷が新大陸へ、中国の絹や陶磁器が東南アジア、西アジア、ヨーロッパへ行き、インドの綿織物がアジアやアフリカへ、日本の銀が中国に行き、中国の生糸と東南アジアの染料、香木が日本に来るというように、人と物の動きが地球全体で徐々に一体化しつつあるような時代でした。基本はアービトラージです。

歴史の復習



© Kaz Okamoto, I-O Wealth Advisors, Inc., 2018, all rights reserved



長期投資仲間通信「インベストラ이프」

東インド会社による物の流通によって生活革命がおきました。喫茶の風習、綿の肌着を身に付ける。塩や胡椒で味付けをするなど、生活そのものが大きく変化していく時期でした。

ポルトガルが、海を越えてアフリカの西海岸へ進出し、さらに喜望峰を超えて、東インドまで到達しました。ヴァスコ・ダ・ガマが、王家のプロジェクトにより、1497年に3艘がリスボンを出発して1498年にカリカットに到着。1499年、2艘がリスボンに沢山の商品を積んで戻ってきました。これにより、ものすごく大きな収益を上げました。

最大の発見は宝の山の東インドの地域には軍事力がほとんどない事でした。王家第2弾のプロジェクトとして、カブラルが13艘を艦装して出航。しかし従来のルートとはそれてしまい、結果としてブラジルを発見。その後カリカットに到達したのですが、8艘減を失い5艘で帰国。事実上の失敗とみなされました。弱気になった王様を横目にヴァスコ・ダ・ガマは再遠征。略奪と狼藉、武力によるインド洋の制圧。ポルトガルによる主要港の支配が進んでいきます。

ポルトガルがスペインと併合したため、スペインに対し敵対していたオランダが、ポルトガルの敵となり、結果、ポルトガル経由で入ってきた香辛料がオランダに入ってこなくなりました。1581年にオランダが独立宣言をして、1595年に東インドに船を出しました。

オランダの6つの大きな都市がそれぞれ独自に船を出し成功。今までポルトガルしか行けなかった東インドへオランダも行けたことで、イギリスも東インド会社を設立。胡椒貿易に危機感を抱いたオランダも、6つの街を合同して東インド会社を設立しました。

イギリスでは、1657年にクロムウェルがオランダへの対抗力を強くするために会社組織の制度改革をします。すでにオランダで始まっていた永続的資本制度を認め、利潤のみを配当金として株主に分配することも導入しました。さらに株主に会社経営の参画を認めます。これはオランダ東インド会社が採用をします。こうしてオランダとイギリスの相乗効果で徐々に今日の株式会社の形に近づいていきました。

東インド会社は今日の生活に大きな影響をもたらしていました。東インド会社の時は、出資者は富裕層、船長船員は生活(労働)者、顧客は富裕層。つまり富裕層が一般生活者を使って富裕層に物を売る。現代の株式会社は、資本の出し手が生活者、経営者・従業員は生活者、消費者も生活者と変化しました。

現代の株式会社とは、生活者1人1人が「こんな世の中にしたい」という思いを込めて、消費者として、従業員として、そして資本のオーナーとして構築する組織です。良い世の中を創るのは生活者しかいないのです。会社はツールでしかない。株式会社というバーチャルな組織を通じて世の中を良くしていこうという一人一人の生活者の思いが株式会社というものに実体を与えています。



長期投資仲間通信「インベストラ이프」

講演では、オランダ東インド会社、イギリス東インド会社、フランス東インド会社の成り立ちから、役割を終え閉鎖を迎えるまでの背景や、その中で発生したバブルについてわかりやすく解説いただきました。また、東インド会社が欧米社会やアジアにもたらしたものについての説明。

最後に、大型船を造り、東インドまでの往來は、大変お金がかかるプロジェクト。そこで、資本を集め、その収益をみんなで分配しようということに変わっていった株式会社は、長い変遷を経て練り上げられ、1600年から今日に至るまで続いている制度です。株式会社の成り立ちを理解することは投資を行う上でもとても大切なことです。